

発行所(郵便番号100)
 東京都千代田区丸の内2-4-1
 丸の内ビルディング781号室
 社団法人スウェーデン社会研究所
 Tel (212) 4007・1447
 編集責任者 岡沢憲夫
 印刷所 関東図書株式会社
 定価200円(年間購読料参千円)
 1990年10月25日発行
 第22巻第10号
 (毎月1回25日発行)
 昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.22 No.10

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
 (The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
 Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

オーストラリアから見たスウェーデン

My View of Sweden from Australia

顧問 早稲田大学教授 中嶋 博
 Prof. Hiroshi Nakajima

ウップサラ大学のU・ダールレーフ教授が、スウェーデン高等教育改革の範としたオーストラリアの遠隔教育の実情視察に去る8月下旬から3週間出かけ、南十字星の国から白夜の国を眺め考えさせられる点が多かった。

まず大学の学外学習については、スウェーデンは遠隔教育を1977年から制度化し成果をあげているが、オーストラリアでは学外学習で殆んどものが履修可能となっている。

公財政支出教育費の対GNP比でスウェーデンは世界一位で公教育中心であるが、オーストラリアのそれは劣るにせよ、私教育の果たす役割の重要性を国民が認めている。

これは福祉のシステムについても同じで、スウェーデンの場合は公的扶助で優れているが、ともすれば冷たく官僚主義に陥り易いとされるに対して、オーストラリアの場合は公的扶助に加え、民間並にボランティアに期待するところ大で細やかに暖かいとみられた。

また多文化社会に関しては、スウェーデンは、母国語教育の義務化にみられるように先進国といえるが、オーストラリアのそれは、移民が物的にも精神的にも安定を得、落付いていることは、警官の姿を見ることの出来ない安全社会となっていることにも徴せられた。

生活水準の高さと社会の平等ということに関しては、タスマニア行き航路を例にとると、3等4人室でもシャワーが備付けられており、シルヤ・ラインやヴィーキング・ラインのように1等室は豪華ではなかったが、より平等の社会を垣間見たようで好感がもてた。

オーストラリアの人がスウェーデンの失業率の

低さに感心しつつも、本国では若者が働くよりも高等教育志向であるといっていたこと。またタクシーの1/3をボルボが占めスウェーデンのハイテク水準の高さおよび産業に一目をおいていたことも付言しておこう。

念願のアリス・スプリングスのロイヤル・フライング・ドクター・サービスおよび無線通信学校の産みの親John Flynn (1880-1951)の墓と記念教会を訪ねることを得たが、このサービスは連邦政府、州政府、寄付金他のそれぞれの1/3で運営されていた。またそのPR番組を非営利のオーストラリア放送が、銀行協会他の後援を受けて行っていることに、この国の道徳的精神的基盤の強さを窺い得た。

湾岸危機に当たっての経済大国日本の貢献が少ないと連日新聞で報ぜられ、一方で学業を中断、恋人と別れを惜しむ臨時徴集の若者の写真をみて、もしかのO・パルメが在世ならば、こうした危機は回避出来たであろうにと、改めて彼の偉大さに思いをはせたことであった。

目次

オーストラリアから見たスウェーデン	中嶋 博	1
スウェーデンにおける幼児保育政策	荒井 冽	2
新「瑞暉亭」の落成	磯野 悦子	4
(統計) 数字で見るスウェーデン (No.9)		6

スウェーデンにおける幼児保育政策

The Policy for Child Care in Sweden

白鷗女子短期大学教授

荒井 洵

Prof. Kiyoshi Arai

出生率が語るもの

1990年6月10日の日本の新聞各紙には、特大の活字で“1.57”という数字が躍っていた。合計特殊出生率、すなわち女性1人の平均出生数が、予想もしなかった数値に落ち込んでしまったというのである。ちなみに、この数値は1966年の丙午（ひのえうま）という特別な年の1.58をも下回り、戦後の最低値を更新した。このことは、1.72あたりを底にして上昇へ転じていくであろうと見込んでいた当局の予想が完全にはずれてしまったことを意味している。

この数値がどのような結果をもたらすかは、およその見当がつく。20～30年後の人口構成を想像すれば暗澹たるものが感じられる。高齢化社会を支えることになるはずの基幹的な部分が、頼りのない、か細い存在となるだろうと考えられるからだ。

このデータがニュースとなって後ほどなく、スウェーデンでは“2.0”にまで回復してきたということも、ニュースとして取り上げられた。このことが母子福祉ないしは家庭福祉の諸施策と結び付くことなのかどうか、当然のことながら関心はそのへんに向けられるのである。

“保育の経済学”の必要性

女性が子どもを生み、胸元で育てる時期と、社会的な活動に入っていく時期とはほぼ一致している。人生のうちで最も元気旺盛であり、かつ分別がついていく時期でもある。すなわち、心身の充実期である。

この時期にある女性をいかに応援し、ひいては家庭生活をいかに支えていくかは、間違いなくこれからの社会の肝心なテーマになると思う。

人間の為すべきことの中心は、社会的な生産活動と、未来へつながる子どもたちを育くむことであると言ってよいだろう。この二つの結接点が家庭生活なのである。ということは、家庭福祉は福祉的諸施策のキー・ポイントであることを意味し

ている。

家庭生活が安定し、幼な子のかわいらしい笑顔と元気な声に満たされるということは、社会の健全さを象徴している。つまり、子育てを喜びとして、気持ちよく行えるかどうかということが重要な問題なのである。

現在、日本には約23,000か所の保育所がある。子育て、すなわち家庭生活の力強い支えとなっている。このことは、同時に生産活動の基盤ともなっているのである。

ということは、乳幼児の保育のありようについては、もはや国全体の経済学的視点からも検討していかなければならないのだと思う。子育て、あるいは保育という、見た目にはささやかで、きわめて家庭的で、そしてかわいらしい光景である営みも、ことは国全体の生産性と社会的な安定に、直接的に結び付いているのである。

実際、社会的な活動に参加している女性は、現在のところ日本の場合で5割ほど、スウェーデンにおいては8割強と推定されている。このことは、女性の社会参加と子育てとのバランスについては、既に大方が必要としていることを示している。

スウェーデンの保育政策の基本

スウェーデンにおける子育てをめぐるサービス体系を概観してみると、次に示す四つの柱から成っているように思われる。

- (1) 妊娠・出産に関するもの
- (2) 親手当に関するもの
- (3) 保育の実際に関するもの
- (4) 児童への諸手当に関するもの

ところで、スウェーデンの児童福祉に関する法律は、「児童・青少年福祉法」（1960年）と「児童保育法」（1976年）の二法とが基本的なものとしてあったが、現在では「社会サービス法」（1982年より施行）によって統一されている。

これらの法律に見られる基本的な考え方は、子

どものいる家庭が、そうでない家庭と同等のレベルの生活が営まれるようにということを目標にしていることである。そして、この目標を具体化するためには、女性が胎内に子どもを宿した時点から、いろいろな角度から手を打つべきだということになるのである。

このような理念には、当然のことながら歴史的な経緯が見られる。つまり、この国の福祉政策のねらいというものが、以前から各家庭を中心とした個人福祉にあったという点である。すなわち、きわめて早い時期から「人口問題調査委員会」のイニシアチブによって、社会的、あるいは身体的なハンディキャップを持つ家庭を援助するための、各種の施策が試みられてきたということである。

“1.57”という数値を見るとき、われわれとしてはスウェーデンの取り組んできた施策とその考え方に、おおいに引きつけられる。つまり、わが福祉行政としての“保育対策”というものが、保育に欠ける云々という、家庭育児を補うといった程度の考え方にとどまるべきものではなく、社会的に確固とした基盤となるべきもの、よりアクティブなものとしてとらえるような理念を、どうしても今、作り上げるべきだと考えるからである。保育は、対策ではなく、根本的な政策であるべきことが求められている。

女性の就労と幼児保育

スウェーデンにおいて保育関係の大幅な伸展が見られたのは1960年代である。これは、女性の就労が急速に伸びたことと平行している。現在では、女性に乳幼児がいるかどうかということと就労との間には、ほとんど関係がないほどまでに至っているようだ。

それには二つの大きな支えがある。まず第一には、産後の授乳期間に職場を離れていても、ほぼ従前に匹敵するほどの経済的保障がなされていることである。これは職種には関係がない。第二には、幼児保育体制の充実である。しかし、これは今もって量的には完璧とはいえない。不足を満たすことが目下の急務である。

保育についての財源を見てみると、地方税、国庫補助、および所得に応じた保護者の負担という点では日本と同様であるが、スウェーデンの場合

は、これらに加えて雇用主の負担がある。雇用側が、かなり保育にかかわっているのである。

しかしながら、保育施設は職場内に設けるという考え方はとらずに、居住地域に設けるようにしている。これは、雇用主が保育施設を提供できるかどうかということが、雇用に影響を与えないようにということと、子どもの生活の上での地域性ということを重ねることによっている。

国際化時代の保育

わが国の保育所保育には、その内容についてのガイドラインである『保育所保育指針』というものが厚生省によって出されている。この1990年の春、25年ぶりに改定された。すなわち、現在のものは第2冊めのものということになる。ちなみに、スウェーデンにも同じようなものが社会福祉庁から出されているが、これは日本のものに比べて実に具体的で、ボリュームも相当なものである。

この中で、スウェーデン当局は移民の子どもの保育のあり方について、かなりの分量を割いているが、これはこの国がいかにか外国からの移住者の問題を大きなテーマとせざるを得ないかを示している。新しい情報によれば、園児の10%ほどはスウェーデン語以外の言葉を母国語にしているという。そのため、保育施設にあっても、そのような子どもたちのために、週に数時間の母国語の教育をしている。かなりの経費を要しているらしい。

日本の『保育所保育指針』にも、今回はじめて“外国人”と“異なる文化”という概念が登場した。いよいよわが日本も国際化の波の中に入ったという感がする。しかし、現実には既に進行している。都市部の保育所の多くはこの問題を抱えている。

日本の現在の産業・経済の状態は、外国からの若い労働者を受け入れる態勢をとっている。ということは、当然のことながら子どもの誕生を意味する。幼児保育の仕事は、国際的な感覚と実際的な対応が緊急に求められている。

折しも、9月30日には「子どものための世界首脳会議」(子どもサミット)によって『子どもの生存、保護および発達に関する世界宣言』が採択された。21世紀は、今度こそ“児童の世紀”たりうるかどうかである。

新「瑞暉亭」の落成

The Inauguration of "Zuiki tei"

北欧文化協会 理事 磯野悦子
Mrs. Etsuko Isono



プリンセス・クリスティーナとガデリウス・タロー氏 (ガデリウスKK提供)

1990年5月28日、それまで激しく降っていた雨もあがり、抜けるような青空の下、木木の葉に陽光きらめく、さわやかな夏の午後である。ストックホルムの町はずれ、ユールゴードの民族博物館。その伝統的な渋い赤色の本館の裏手の小高い丘の上に、白木もま新しい茶室“瑞暉亭”が木の間にぐれに望まれる。

昨年12月4日、東京での仮建築贈呈披露を終えた茶室は、急ぎ解体、輸送され、空路渡瑞した職人の手により、滞りなく完成した。設計者、京都工芸繊維大学の中村昌生教授も、途中現地^①に指導におもむいた。ダーゲンス、ニーヘーテルは、今年4月1日には、日本人大工が仕事をしている写真、又、5月26日には、中村教授の指図のもとに、スウェーデンの職人が踏み石を置いている写真と共に、茶の湯及び瑞暉亭に関する記事をのせた。テレビ局は、茶事の進行を妨げないように配慮しながら取材をし、スウェーデンの人たちは、瑞暉亭及び日本文化に高い関心を示している。

※(旧瑞暉亭、並びに新瑞暉亭再建についての経緯は、「月報22巻1号」に小野寺百合子氏が記されている。)

午後3時、多数の出席者で立錫の余地もない本館食堂の式典会場に、プリンセス・クリスティーナ・マグヌソン夫人が到着される。再建に大変な努力をしたウラ・ワグナー民族博物館長の歓迎の辞、村角駐瑞日本大使、田中寄贈実行委員長、タロー・ガデリウス ガデリウス名誉会長の挨拶。つづいて田中氏とガデリウス氏が日瑞両サイドの寄贈者を代表して「瑞暉亭」の扁額をプリンセス

・クリスティーナのお手に。王女はそれをワグナー館長に渡される。更に、日本側寄贈者、王子、十条、本州、神崎、製紙四社を代表して、河毛王子製紙会長と江崎神崎製紙副社長が「茶道具贈呈目録」を王女にさし上げ、王女はそれをワグナー館長へ。それからプリンセス・クリスティーナのご挨拶。ワグナー館長は扁額をエクマン博物館主事に渡し、エクマン主事が茶室入口に掲げる。今日の司会は、再建のために奔走したアンネ・ムレー副館長。

その間、主だった来賓は、列になって新瑞暉亭への細いゆるやかな坂道を歩む。掲げ終った扁額の下、罫口の前には、日瑞両国旗の色、紅白3本、青黄3本のテープが張られている。スウェーデン側よりプリンセス・クリスティーナ、タロー、ガデリウス氏、ワグナー館長、日本側より村角大使、田中寄贈実行委員長、佐々木日本テレビ会長が、各各テープに鈿を入れて落成式は無事終了。

いよいよ記念茶会が始まる。旧瑞暉亭の寄贈者、故藤原銀次郎氏の令嬢阿部喜美子夫人は、伝統を重んじながらもお茶を楽しむという父君の心を、スウェーデンのんびりと伝えたいと、令嬢3人に手伝わせて、小間の亭主を務めた。第一回目、正客、プリンセス・クリスティーナ、連客、村角大使、田中氏、ガデリウス氏。王女の入られる貴人口のそばには、祖母、故イーダ・トロチック夫人の志の再現に心血を注いだ孫娘、ウメ・ラードブルクとガビー・ステンベルイ・コッホの姉妹が、喜びに満ちた顔を並べ、王女の入室のお世話をす。席中では、ワグナー館長が席主として挨拶する。

一方、広間では、ストックホルムの裏千家同好会を主催し、現地で茶道を教えている、エイコ・デューク夫人が、日瑞両国人の弟子に手伝わせてお茶を点てる。村角大使夫人や、ホルムクヴィスト東京ガデリウス社長夫人が各回の正客となり、廻りの畳縁には、正座の困難なスウェーデン人の

客のために、ストールが用意された。

瑞暉亭内の二席では入りきれない客のために、式典の行われた本館食堂の一角に、四畳半の仮設の茶室がしつらえられ、点前のデモンストレーションが行われた。茶道の稽古をしている若い女性の博物館員が2名、客となり、日頃の練習の成果を多数の人びとの前で披露した。現地在住の日本婦人たちは、忙しい時間を割いて集まり、協力して大勢の出席者に点て出しで、はるか日本より運ばれて来た茶菓を供した。

各席では、秩父宮妃殿下のご寄贈の道具、阿部夫人及び王子関連4社より寄贈の道具、ストックホルム在住の陶芸家、藤井エミ女史製作の道具等が、取り合わせて使われた。床の花入れには、博物館の周辺の野の花や、庭に咲く花が生けられた。

参加者は、五月の陽光注ぐ園庭を散策したり、講堂で「茶の湯」のビデオを見たり、館内に陳列されている旧瑞暉亭ゆかりの品を鑑賞したりしていた。藤原氏寄贈の茶道具、当時使われた大工道具と共に、旧瑞暉亭の扁額も並んでいた。これは焼失したと思われていたものが、最近、偶然、無事保管されているのが発見されたものである。

5時ごろになると、村角大使夫妻主催のレセプションに入り、すし、天ぷら、やきとり等を片手に、酒、ビール等を楽しむ人びとの輪が、あちこちにできた。宴半ば、庄司王子製紙総務部長の音頭で、中締めの高らかな手拍子が響く。庄司氏の着けている印半天は、往時、藤原家で出入りの職人に与えていた家名、家紋入りのものが、たった一着残っていたのを、今回、阿部夫人が持参し、中締めのあと、ワグナー館長の手へ渡った。まだ

日の高い北欧の夏の夕方、参加者は、丘の上の茶室をふり返りながら立ち去っていった。茶会は翌日も続けられ、デューク夫人が一般参加者に、数回に亘って茶菓を供した。

四半世紀以上を日本で過ごし、日本を心から愛したイーダ・トロッチクが、当時の民族博物館長リンドブロム博士と共に、当時の製紙業界の王であり茶人でもあった藤原銀次郎という、又とない協力者を得て、績年の夢「瑞暉亭」が落成したのが1935年10月。以来、日瑞の文化交流の架け橋として、大切な役割をになって来たが、惜しくも焼失したのが、1969年10月。しかし、旧瑞暉亭に結集した心は、炎の中に消え去りはしなかった。

1990年5月、旧瑞暉亭にえにしの緊がる人びとの熱意と努力が実って、再び瑞暉亭はよみがえった。初代の茶室に「瑞暉亭」と命名された故秩父宮殿下と共に、その仮建築披露にご臨席になった妃殿下のお喜びもひとしおであった。又、若き日に、藤原氏の旧瑞暉亭作庭の石探しを手伝った、タロー・ガリデウス氏も、新旧両瑞暉亭の建設に関った数少ないひとりとして、感激を新たにされた。前記の通り、落成式では、王室から庶民までが、日瑞交流の絵巻物を繰り広げた。しかし、瑞暉亭が真に日瑞文化交流の場となるかどうかは、今後にかかっている。すでにストックホルムでは、ワグナー館長を中心に、これからどのように運営していくのか、諸費用をどうするのか等の諸問題を協議する委員会が組織された。日本側としても、折角の先人の偉大な業績と抱負を、ますます実りあるものにするために、協力できることを真剣に考える必要がある。

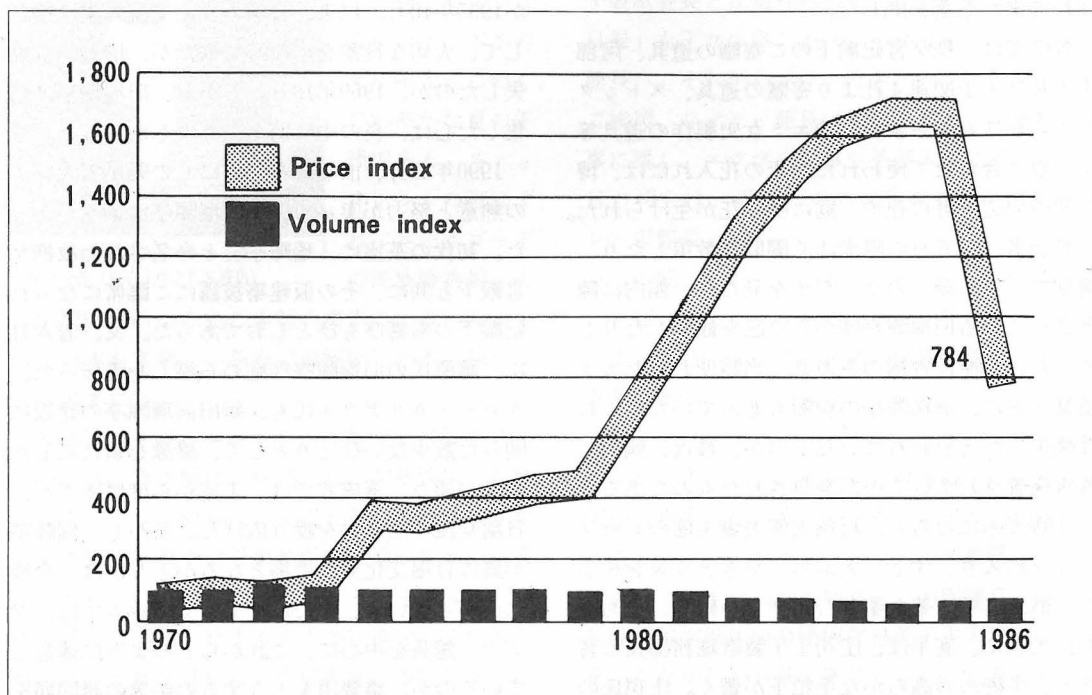
〈訂正のお知らせ〉

本研究月報Vol.22 No.1の2ページの新「瑞暉亭」の贈呈式の記事のうち、同ページの末尾より5行目の1964年（昭和39年）と印刷してありますのは、1969年（昭和44年）の誤りでありますので、お詫びして訂正させていただきます（事務局）。

数字で見るスウェーデン (No. 9)

⑨石油の輸入 (Oil Imports)

Sweden was one of the industrialized countries that was hardest hit by the sharp oil price increases of the 1970s. Since the middle of that decade, Swedish energy policy has focused strongly on reducing the country's dependence on oil—all of which must be imported. The picture shows the price and volume trends of Sweden's imports of oil and petroleum products.



Sweden's net imports of crude oil and petroleum products, 1970-1986
Index 1970=100

Year	Price index	Volume index
1970	100	100
1972	96	113
1974	367	97
1976	409	99
1978	458	88
1980	998	87
1982	1,494	67
1984	1,692	51
1985	1,680	59
1986	784	66

Sources: Statistics Sweden and the Swedish Institute of Economic Research

The decline in oil imports since 1970 is mainly due to a changeover to other energy sources, primarily nuclear power, and to improved energy conservation in response to higher oil prices.

During the 1970s, Sweden's exports of refined petroleum products increased, amounting to nearly 3 percent of total merchandise exports in 1986. These products accounted for about 10 percent of the total value of Swedish imports in 1970. This share increased to nearly 25 percent in 1981. In recent years, the percentage has fallen and was down to the 1970 figures.

Sweden is one of the world's most oil-import-dependent countries. The net cost of petroleum imports amounted to more than SEK 2,000 per inhabitant in 1986.

昭和44年12月23日
経済学研究所
定価100円